

いま にし たく
今西 卓

高潔なる人格、卓越せる見識
－革新のナイヤガラ式発電所－



今西 卓 (1883 ~ 1933)

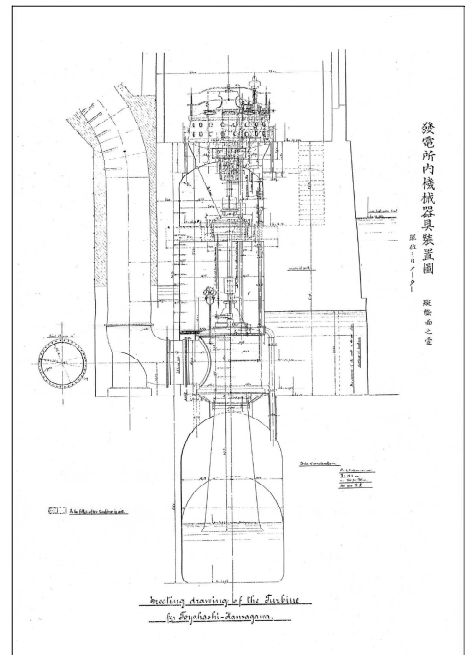
写真：『三遠南信産業遺産を歩く』

■ **生い立ち**

今西卓は、1883(明治16)年、岐阜県揖斐郡池田村(現、揖斐郡池田町)に父今西文三、母クミの長男として生まれた。今西は、幼少の頃から頭脳明晰で、地元の小学校を卒業後は、大垣中学校に進み、第三高等学校を経て京都帝国大学電気工学科に入学した。京都帝大では、電気工学の権威青柳栄司教授のもとで学んだ。今西は、京都帝大を1908年に卒業したが、卒業時には金杯が授与された。トップないしはそれに近い成績であったであろう。

■ **豊橋電気への就職**

今西卓は、京都帝大卒業後に、当時大井川の電源開発をして東京への電力供給を目指していた日英共同プロジェクト、日英水力電気に就職が内定していた。ところが、日英の資本の割り当ての交渉が進まず、会社は発足できないでいた。一方、1894年に設立の豊橋電灯は、1908年に社名を豊橋電気と変更し、1908年には藤岡市助設計による見代発電所が建設された。豊橋電気は、見代発電所の建設で資金難となったため、名古屋電灯の福沢桃介に強力な援助を頼み、福沢は1910年に豊橋電気の第四代目の社長となった。福沢が豊橋電気の経営に参加し始めていた頃、福沢が優秀な電気技術者を探し求めていたところに、側近の青木義雄が今西を紹介した。今西は、日英水力がはっきりしないので、当面、腰掛けのつもりで豊橋電気に主任技師として就職した。その後、日英水力電気は、資本割り当て交渉が不調に終わり、当初の構想とは異なる小規模な発電会社になってしまったこと、豊橋電気の期待の大きさに応えて、今西はそのまま豊橋電気にとどまることになった。



長篠発電所の設計図

出典：「我國に於ける「ナイヤガラ」式発電所の嚆矢」

■ **長篠発電所の設計で、わが国初のナイヤガラ型を採用**

豊橋電気に就職した今西卓の最初の仕事は、新しい水力発電所の建設であった。今西は、豊川流域を調査し、豊川の支流の寒狭川(現豊川)下流の長篠に適地を見つけ、そこに大規模な水力発電所を建設することにした。

今西は、恩師青柳栄司教授の助言も得つつ、当時、日本にはなかった立軸水車を長篠発電所の発電設備として採用し、設計した。今西はこの発電設備の形式について、米国のナイヤガラ発電所を範としたので、ナイヤガラ型と呼んだ。立軸水車にすれば、落差を最大限に活かすことができ、洪水時に発電機が水没することも防げた。水車は、ドイツ、フォイト社製のフランス型水車で、ランナ(水車の羽根車)は缶筒型と呼ばれる円筒形のケーシングの中に納められた。水車の出力は、使用水量毎秒4.3トンで900馬力である。発電機は、ドイツ、ジーメンス・シュッケルト社製の三相交流60Hz、回転数360rpm、電圧11,000V、出力500kWである。

長篠発電所は、1900年に着工、1912年に完成した。発電所脇に立てられている長篠発電所竣工記念碑には、「水車発電機共ニナイヤガラ型ト称シ、本邦ニテ本発電所ヲ以テ使用ノ嚆矢トナス」と刻まれている。

■ **東三河の事業王**

今西卓は、長篠発電所建設以後、布里発電所(1919)、横川発電所(1922)を建設するが、同時に豊橋電気の経営にも参画し、卓越した経営手腕を発揮した。1922年、今西は豊橋電気を離れるが、水窪川電力、豊橋電気信託、渥美電気鉄道(現・豊橋鉄道の渥美線)、豊橋電気軌道(現・豊橋市電)、三河セメントなど10社の役員に就任、東三河の産業発展に貢献したが、1932年暮れに肺がんが発病し、翌1933年、49歳の若さで逝去した。



長篠発電所のドイツ製発電機 写真：筆者撮影

(石田正治)